



Title	<紹介> 藤井由紀子著『異貌の『源氏物語』』
Author(s)	飯田, 実花
Citation	語文. 2022, 118, p. 71-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95235
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

藤井由紀子著『異貌の『源氏物語』』

飯田実花

本書は、「もののけ」「夢」といった異界に繋がる存在・力へ関心を寄せ、『源氏物語』における描かれ方・意味を見いだしてきた藤井由紀子氏の、はじめての論文集である。タイトルに「異貌」とある通り、従来の研究とは異なる視座から『源氏物語』を捉え直すことで、これまで見えてこなかった、あるいは曲解されてきた、『源氏物語』の異なる「貌」を導いている。

以下に、本書の構成を目次によって示す。

凡例

第Ⅰ部 『源氏物語』という「物語」

第一章 光源氏の「日記」考

第二章 「昔物語」考

第Ⅱ部 『源氏物語』を〈読む〉ということ

第一章 藤壺の宮の「女心」

第二章 須磨の暴風雨

第三章 「静かなる」六条院

第Ⅲ部 六条御息所論

第一章 『源氏物語』の靈魂観

第二章 六条御息所の「心の執」

第三章 鈴虫巻の六条院

第Ⅳ部 「夢」と「猫」の表現史

第一章 柏木の猫の夢

第二章 〈懷妊をめぐる夢〉の諸相

第三章 平安文学における猫

初出一覧／あとがき／索引

第Ⅰ部では、『源氏物語』が、その物語世界において、『源氏物語』自身をどう位置づけているか明らかにする。特に、総合巻で知られる光源氏の「旅の御日記」を、須磨巻・明石巻のプレテクストとして位置づける視点は、それ自体として『源氏物語』の異なる側面を明らかにしたものであり、本書の第Ⅰ部第一章に置かれることで、「異貌」というタイトルを体現させてみせている。

第Ⅱ部には、現代まで続く『源氏物語』読解における先入観の見直しを促す論考が集められている。そのことが顕著にあらわれているのが、第一章「藤壺の宮の「女心」」である。藤壺の宮の「女心」を過剰に読み取ってきた古注釈以来のバイアスを批判しつつ、「おほかたに」の語義を物語のなかで確定することで、読者個人の〈読み〉へと逃げない、『源氏物語』本文が描出する藤壺の宮の姿を明らかにしている。

第Ⅲ部に収められた論考は、いずれも「六条御息所」「もののけ」という、『源氏物語』正編における、論じつくされたとも思われるようなトピックを主題としている。諸氏により研究が重ねられてきたこのテーマに対し、藤井氏は語の使用感覚やエピソードの特徴を掴むことにより、新たな視点から、「もののけ」としての

六条御息所の行動原理を鮮やかに論証している。第Ⅲ部第一章における「靈魂觀」のような、当時の「もののみかた」を説明することは容易ではない。しかし、藤井氏は、遊離魂信仰の在り方について「死に際して魂が身体から離れる現象」という最大公約数的な捉え方へと立ち戻り、登場人物たちが「もののけ」と捉える「心」の問題へと論点を移すことで、その解明に至っている。全三章を通じて、六条御息所の「生霊」としての姿、「死霊」としての姿、その〈鎮魂〉の様相が論じられ、「もののけ」としての六条御息所のはじまりから終わりまでが一貫した立場からまとめられているのである。

第Ⅳ部に収められた三本の論考は、同一の場面、すなわち「柏木の猫の夢」を問題意識の中心に置くものの、元々はそれぞれまったく異なる時期に書かれた論考であった。三本は相互に補完的な要素をもっており、これが第Ⅳ部としてまとめられたことで、「柏木の猫の夢」の、物語における意味と文学史上の位置付けを捉えることができるようになっていく。これまで「猫の夢」と「懷妊」という視点から考えられてきた問題を、「猫」と「懷妊の夢」として捉えなおした結果、従来の研究において、あるとも知れない「俗信」として解釈されていた問題を、「懷妊の夢」のなかに位置付け、柏木の深層心理・物語の展開への予兆までも読み取ることとに成功している。従来の研究に対する着眼点の新しさはもちろんながら、「夢」や「猫」といった魅力的ながら捉えどころのないトピックを、堅実な用例調査と読解によって具体的に説明して

いった点に、この論考の面白さがあるだろう。

本書において重ねられた一つ一つの丹念な論証は、『源氏物語』を読む人々、特に研究者への警鐘でもあるように思われる。古注釈が提示した人物像を無批判に受け入れてはいないだろうか、「異界」という怪しい言葉の響きに惑わされて論理を飛躍させてはいないだろうか、「俗信」とみなすことで思考停止してはいないだろうか、こうした問いかけが本書から聞こえてくる。そして、個々の言葉やトピックに関わる用例を網羅的に収集し、そこからその語の意味・使われ方を抽出して導く藤井氏の論証方法は、こうしたさまざまな要因による「惑い」を跳ね除ける確実な方法であることを教えてくれるのである。本書に収められたすべての論考は、当たり前のようにも思われる方法論を、広い視野と繊細さをもって実行した、その成果にほかならない。

先述のとおり、本書が研究者にとって必携の書であるのはい言までもないが、個人的には、卒業論文を書くこうとする学部生に読んでほしいと思う。用例調査と、先行研究との差異を明確に示す論法から導かれる、「これだけは動かない」という結論までの道筋は、『源氏物語』の学術論文を書くこうとするうえで、これ以上ない手本となるのではないだろうか。

(武蔵野書院、二〇二一年五月、二八四頁、八、〇〇〇円＋税)

(いいだ・みか 本学大学院博士後期課程、

日本学術振興会特別研究員)